

られないが、それを名字即ち置くことを、一応は言えよう。然し、法華經を持つ者が、仏子・仏使であるという意見が、遺文の各所に散見していることより考えれば、聖人は、成仏位の設定よりも、法華經の受持・不受持を問題としておられるように思われる。叡山の諸師が成仏位を下げることに、その努力を傾けていたことは、大きな態度の相違と言える。更に、法華經を受持する、しないに比重を置く聖人の場合、即身成仏の面より修行の意味を考へることが、新たな問題として提起されねばならないであろう。

近世日蓮宗の千部会について

——その性格をめぐって——

望 月 真 澄

『日蓮宗宗憲』の第五十四条には、日蓮宗の年中行事として、宗祖法難会・宗祖降誕会・立教開宗会等の九項目が掲げられている。これらの中でも、近世の日蓮宗寺院で行なわれた大規模な仏教儀礼に、千部会・御会式が

ある。この両儀礼は、「二季の大会」と言われ、池上本門寺・中山法華經寺などの寺院では、春のお千部・秋のお会式として庶民に親しまれていた。

本発表は、このうち千部会を研究対象とし、儀礼の性格やその機能について、若干の考察を試みたものである。

千部会とは、『望月佛教大辞典』によると「祈願・追善等の為に千部の經を誦する法会」とある。誦する經典は、法華經・淨土三部經（とくに阿彌陀經）・藥師等經があり、各宗派で行なわれる千部会の代表的なものに、淨土真宗の阿彌陀經千部・日蓮宗の法華經千部があげられる。

特に日蓮宗で行なわれる千部会は、法華經一部八卷二十八品を一部とし、これを千部誦することであり、これを法華千部と称している。

しかし、近世の史料には、千部誦という語句は法華經の誦のみでなく、奉唱題目千部誦と題目を千部誦誦する場合や、千卷陀羅尼修行のように祈願のため陀羅尼を千卷誦する場合もあり、様々な形態があった。

それでは、こうした概念規定に基づき、日蓮宗で行なわれた千部会の開始時期を史料的にみると、宗祖百五十五遺忌の永享三（一四三一）年十月四日から十三日の十日

間、京都本國寺が諸末寺を登山せしめて修したというのがその史料の初見である（『本國寺年譜』）。

こうして、中世において既に行なわれていたわけであるが、近世における千部会の性格を知るため、各地の千部会の事例を整理してみると、次の二つに分類できる。

(1) 祈願の為に行なう場合

(イ) 京都本國寺では、文祿元（一五九二）年文祿の役に際して十六世日願が法華一万部誦誦會をもって戦勝を祈る。

(ロ) 比企谷妙本寺で、寛永十八（一六四一）年、心性日遠導師のもとに養珠夫人の二世所願円満法界利益を祈る。

(2) 追善の為に行なう場合

(イ) 池上本門寺で、宗祖四百五十遠忌に際し五千部の經を誦誦し、信者に十萬部の題目を勧める。

(ロ) 金沢本法寺で、宗祖五百五十遠忌に際しその年の六月十七日から二十六日までの十日間万僧千部執行があり、金沢の本法寺末寺が登山している。

(ハ) 中山法華經寺で、日常三百遠忌に際しその年の三月一日より万部經が行なわれ、百人の僧が出仕する。

(ニ) は、個人が願主となり、その祈願を行なったもので

あり、(2) は、寺院が願主となり、宗祖や先師先哲の追善を行なったものである。

いずれの寺院も、日蓮宗では代表的な寺院であり、本寺格の寺院である。すなわち、千部会は、大寺院の行事として行なわれたのであり、末寺の本寺への登山が義務づけられていた。池上本門寺の末寺では、「一日路二日路者毎年一度三日路者毎年一度五日路以後五年一度如先規必可遂登山事」（『大田区史』寺社1）という登山規定があったほどである。

これらの行事は、不定期な行事で、寺院や特定の人物といった個人が願主となる場合であった。しかし、近世中期以降になると、願主は庶民が中心となり、行事は年中行事として行なわれるようになる。これは、千部会が庶民を対象としたものであり、その目的が寺院修復にあったためである。したがって、千部会も金銭を集める手段として行なわれるようになり、庶民は永代千部の施主として金品を寺院に奉納し、先祖の供養を行なったのである。

こうして、近世の千部会は、祈願・追善を目的とするものであったが、近世の儀礼として定着したのは、近世中期以降である。これは、千部会が年中行事化したこと

によるものであり、広く一般庶民を対象としたためである。

なお、庶民は、講中を結成し、千部会に参加するわけであるが、千部会に求める庶民の信仰及び庶民の参加形態については稿を改めたいと思う。

立正観抄と法華問答正義抄

高橋謙祐

立正観抄と中山門流の等覚院日全の法華問答正義抄との関係について若干の考察をする。周知の通り、立正観抄は止観勝法華説を取り上げて中古天台を明確に批判した注目された論書である。近年、止観勝法華の創唱者を論点に、また禪勝止観や特異な口伝書の引用から真偽が問われ、身延の日進書写本が日進直筆であることが確認されるに及んで、今日では真蹟とみなされているが、年来の交流があった日祐の聖教録に名を連ねていないなどまだすっきりしない点もある。

日進・日祐に教学の指南を仰いで宗義の確立をはかっ

たのに等覚院日全がおり、その著に法華問答正義抄がある。日全の記述によれば、日全は永仁二年の生れ、日祐より五歳年長、武蔵国仙波と交流をもち、比叡山に住して恵檀両流義を学び、殊に東塔西谷覚林房禪美に止観勝法華を、経藏坊頭円には禪勝止観についてその真相を問うている。その後身延で日進に宗義を学んで、正慶二年中山に在住して問答正義抄を起稿、晩年病をおして康永三年脱稿、同年寂。多くの遺文を引いた多岐にわたる論述には、日祐蒐集の龐大な聖教、比叡山や身延などでの見聞が背景にあり、中でも二十二巻は仙波や比叡山での論談がみられ、そこには観心の正義を糾さんとする気魄が看取される。その記述は、日蓮滅後四十年頃には止観勝法華や禪止観思想がポピュラーになっていて日蓮門下周辺で広く知れ渡っていた風潮を伝えている。正義抄は前半は法華経要義、後半は各宗見聞を論述し、特に二十二巻では法華止観勝劣事並びに当家観心の法体と行相を論じ、中山門流の観心修行の姿勢が知られる。日全はこの巻執筆の理由を止観勝法華の邪義を破して正義の料を立てる故と記しているが、実は、立正観抄にみられる。止観は法華経によるという論拠となる引用文がほぼ同じ形で、同じ論拠として正義抄の二十二巻の中に見出され